

# 「シメる教育」を 超えて

「1週間の労働時間は先進国で最長」「事務作業と課外活動に追われ、忙しさゆえに自主的研修から足が遠のいている者も多い」「学級の雰囲気や同僚関係が良好で職務にやりがいを感じている場合も多い」が「教育実践に対する自己効力感」は先進国で最低」で「もう一度、職業を選べるとして『教師になりたい』と思わない者が4割を超える」——2013年に行われたOECDのTALIS調査が浮き彫りにしたのは、日本の教師たちの激務の実態と、自身の教育実践への満たされない思いだった。

そうした状況のなかで、近年「ブラック学級づくり」や「毅然とした指導マニユアル」といったタイトルの書籍が売れていると聞く。いずれも学級経営・学校経営のためのハウツーを記したのだが、そこで論じられている内容の中心となっているのは「問題のある子どもをいかにしてシメればよいか」「子どもを思いどおりに動かすために何をすればよいか」などであり、子どもや保護者の声に耳が傾けられることはほとんどない。

この種の本が売れる背景には、他の有効な選択肢が十分に知られていないという点があるのだろう。多忙のなかで本を手取るのは学校の状況を変えたいと願う熱心な教師であろうから、その思いに答えられていない現状があることは大きな問題である。そのため本特集では「シメる教育」あるいは「あめ館とむち鞭」によって子どもに迫る行動統制法の限界性を明らかにし、それに代わる教育実践の提案を行っていききたい。